

機関番号：12608

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20530435

研究課題名（和文） 本居宣長とネイションの形成

研究課題名（英文） Norinaga Motoori and the Building of Nation

研究代表者 橋爪 大三郎 (Hashizume Daisaburo)

東京工業大学・大学院社会理工学研究科・教授

研究者番号：10218399

研究成果の概要（和文）：

本研究は、プレ近代中期における本居宣長の業績が、幕末～明治期のネイション（日本国民としてのアイデンティティ）形成に決定的な役割を果たしたことを論証した。宣長が主導した国学は、仁斎や徂徠の方法を、無文字時代の日本を記述するテキスト『古事記』に適用するもので、当時の社会規範や制度のありようを、独自のテキスト操作によって実証的に明らかにした。これを基礎に、幕末期のネイション形成の言説が可能となった。

研究成果の概要(英文):

The purpose of the research is to show that the works of Norinaga Motoori played a crucial role in building the identity of Japanese people as a nation. Japanese study initiated by Norinaga applied the method of Confucianists Jinsei and Sorai to the Japanese ancient text Kojiki which describes the norm and institutions of non-literal Japanese society. His work provided the foundation for the formation of discourses of nation building in the last ages of Edo period.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード： 本居宣長

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本の近代化の源流をプレ近代思想のなかに求めた先行研究として、政治学者丸山真男の『日本政治思想史研究』、山本七平『勤勉の哲学』『現人神の創作者たち』、小林秀雄『本居宣長』などがある。これらは重要

な論点を指摘しつつも、プレ近代思想の総体が日本近代化の原動力となった条件を完全に明らかにしてはいなかった。

(2) 江戸期の新儒学のほかに国学が要請された背景には、中国社会の固有の文脈に深く依存している儒学の論理を、方法としてだ

け取り出し、日本のテキストに適用する作業が不可欠であった。江戸期の新儒学と国学の並行関係に注目すべきであったが、そうした先行業績は存在しなかった。

(3) 本居宣長の業績の文学的・思想的意味に注目する小林秀雄の仕事があったが、その困難と弱点を衝いたのは橋本治の『小林秀雄の恵み』の業績があるのみで、社会科学の分野から縦横にこの問題を切開する仕事は現れていない。

2. 研究の目的

(1) この研究は、プレ近代中期における本居宣長の業績が、幕末～明治期のネイション（日本国民としてのアイデンティティ）形成に決定的な役割を果たしたことを論証することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 本居宣長の研究書、具体的には、村岡典嗣『本居宣長』、小林秀雄『本居宣長』、橋本治『小林秀雄の恵み』、丸山真男『日本政治思想史研究』などを整理し、従来の読解の概略を精査した。

(2) 本居宣長『古事記伝』における論述の実際を再構成し、従来の読解と照合した。

(3) 現代哲学や社会学の先端的理論、具体的には、ヴィトゲンシュタインの言語ゲームの議論や分析哲学の成果を援用し、本居宣長の方法を批判的に再構成した。

4. 研究成果

(1) 村岡典嗣『本居宣長』、吉川幸次郎『仁斎・徂徠・宣長』、小林秀雄『本居宣長』の三つの先行業績を整理し、真淵→宣長→篤胤の系譜関係を再構成した。

(2) 宣長が古典体の和歌を詠むことに生涯こだわり続けた理由が、無文字時代の口承日本語を継承する「感性共同体」に帰属する態度表明であることを、宣長の『古事記伝』のテキストから検証した。

(3) 『古事記伝』の、口承日本語伝承の文字記録の語義の用例解析の実証的研究が、再帰的決定＝原日本語システムの自立を検証する作業であることを、論証した。

(4) 用例のなかに規則（ルール）を認めるヴィトゲンシュタインの言語ゲームのアイデアのなかに、宣長の業績と並行する論理が存在することを指摘した。

用例による語義確定（同時決定による意味システムのロジック）を開発したのは、伊藤仁斎や荻生徂徠ら江戸の新儒学の功績である。この方法を、自覚的にとりいれ、異なるテキストに適用したのが、宣長の特筆すべき業績であることが明らかになった。

(5) 本居宣長と儒学者とのあいだの、いわゆる「道論争」が、ヴィトゲンシュタイン

の言語ゲームを法理論に応用したH・L・A・ハートの1次ルール／2次ルールの概念によって、明確にモデル化できることを示した。すなわち、宣長の「道のないところに道がある」という言明を、「(2次ゲームのなかで文字によって記述されていないという意味で)道(=記述されたルール)がないが(日本の)道(=記述されないが遂行される原日本社会の1次ルール)である」という言明として解釈できることを示した。

このような宣長の主張は、従来信じられてきたようなファナティックな国粹主義者のものではなく、単に合理的で論理的な帰結のべたにすぎないと明らかとなった。

(6) 「道論争」の結果、江戸の新儒学の結論と異なり、宣長は『古事記伝』のが実証した、中国文明が伝来する以前の無文字時代の原日本社会において、すでに法規範や政治が機能し、天皇が統治者として君臨していたこと、日本の民衆は教えられずとも、天皇におのずから服従していたこと、を論証した。この架空の、しかし実証された共同性を、幕末維新の人びとはネイションとして再定義することができた。

(7) 本居宣長のものあはれ論は、上記の1次ゲームに内属する内的視点の客観性を担保することを目的とする。この内属を確かなものとするため、宣長は、生涯にわたって和歌を詠み続けた。この彼の生涯が、方法的に一貫した志に貫かれたものであったことが、明らかとなった。

(8) プレ近代日本の思想の系譜学は、プレ近代西欧の宗教改革と並行関係にあることが示された。ただし、西欧の宗教改革の場合は、原典の語義解析を根拠に通用解釈を批判するのに対し、プレ近代日本の思想の場合は、原典の語義解析の方法（仁斎・徂徠による）を、無文字テキストに援用し（宣長による）、通用解釈を批判する。すなわち、新儒学と国学とのカップリングによる批判的作業がその根幹をなしていることが明らかとなった。

【宗教改革】

【江戸新儒学】

聖書（神の言葉）	経典（孔孟の教え）
スコラ哲学（解釈）	朱子学（解釈）
ルター（聖書中心）	仁斎徂徠（原典）

(9) このことを、さらに詳細に説明しよう。

儒学は中国の古い文字テキストを読解する。

国学はそれにならって、日本の古い文字テキストを解説する。宣長は『古事記』に着眼

した。宣長が注目するまで、『日本書紀』に比べて格が低いとされていたテキストだ。

『古事記』は、太安万侶が稗田阿礼の協力をえて、712年に完成させたもの。『日本書紀』が中国の正史を意識した漢文体であるのに対し、万葉仮名のような独自の表記を多く用いている。それは、『古事記』が無文字時代からの口承伝承を多く含んでいることを意味する。

本居宣長の『古事記伝』は、『古事記』が、漢字が到来する以前の無文字時代の日本のルールを伝える文字テキストであることを、証明する。この証明のために必要な概念対が、漢意／やまごころ、である。

漢意とは、儒学や仏教、すなわち、中国から伝わった知識のシステムをいう。広く考えれば、漢字とともに中国から伝わった意味や価値のすべてである。日本語は、漢文とやまとことばが混じり合った、漢字かな混じり文が基本になった。漢意は日本語のすみずみにまで浸透している。

宣長は、その漢意を除きされ、と言う。

その意味は、少なくとも『古事記』を読解する場合に、漢意の効力をキャンセルしなければならない、ということである。たとえば、『古事記』の冒頭が「天地初発之時」とあっても、テンチショハツノトキと読んでではだめで、アメツチノハジメテヒラケシトキと読むのである。やまとことばがまずあって、それに漢字が意味的にあてられた。それを、漢字熟語としてよんでしまったのでは、文字の到来する以前の日本語の意味や価値の空間を復元することができない。このように、『古事記』を口承伝承の宝庫してとらえ、それを記する日本語の意味価値を確定することが、宣長の『古事記伝』の作業である。そしてこの作業は、仁斎や徂徠の新儒学の「科学的実証法」によって鍛えられ、触発されたものだ。

宣長の『古事記伝』は、文字（漢字）が伝わるより前の時代に、人びとの原初共同体が存在していたことを証明する。そして、それより前に、人びとが社会規範（1次ルール）に従っていたことを記述している。

ここから、どういう結論が導かれるか。

それは、天皇が、その当時から日本の統治権者であること。それは、伝統的に決まっていたのであって、儒学（朱子学）による正統化とは関係ない。すなわち、天皇は、儒教的・中国的な意味での皇帝（天子）なのではなく、それ以前の日本の意味での天皇（すめらみこと）なのである。日本語を共通言語とし、天皇を統治権者とあおぎ、中国と無関係に自律的な共同体を築いていた、原日本が、ネイションの原風景として浮上する論理がこれである。

宣長は、漢字かな混じり文で思考し行動する日本人を、中国文化の影響（漢意）から解

き放つたらどうなるかを思考実験した。そこには、やまごころが残る。やまごころをもつ人びとのつくる社会は、原初の日本共同体である。万葉集に古事記に源氏物語といった、日本語の伝統につらなる人びとは、のこらず、宣長の夢想する原始共同体の子孫であることになる。文学の共同性だからこそ、文学として逃れがたく人びとをとらえる、強い政治的効果をもつのである。

(10) このように、本居宣長の業績を、日本の古典テキストを用いた言語ゲーム論的な達成と理解することで、日本社会の系譜学的な分析の新たな可能性を示し、日本社会学の理論的な発展をはかることができた。

(11) 今後の課題として、宣長の切り開いた地平を、平田篤胤や会沢正志斎や吉田松陰や…に接続して、ひとつの系譜に接続する作業が、課題として浮かび上がった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 橋爪大三郎「思想の言葉と社会学の知」『思想地図』5号、pp113-130、2010、査読なし。
- ② 橋爪大三郎「例外的個人を排除するルール」『朝日ジャーナル（週刊朝日臨時増刊）』5057号、pp125-127、2011、査読なし。
- ③ 橋爪大三郎「中東革命と日中関係」『朝日ジャーナル（週刊朝日臨時増刊）』5058号、pp134-136、2011、査読なし。

〔学会発表〕（計2件）

- ① 橋爪大三郎、「新儒学の展開と国学ならびにネイションの形成」、国際社会経済フォーラム2009、2009年3月28日、台湾清華大学社会学研究所
- ② Hashizume, Daisaburo “Lessons from Japanese Modernization to Middle Eastern Countries”, Dialogue between Japan and Islam Civilizations on Science and Technology (sponsored by Ministry of Foreign Affairs, Japan), March 24, 2010, Abu Dhabi, UAE

〔図書〕（計4件）

- ① 橋爪大三郎、筑摩書房、『橋爪大三郎の社会学講義』、2008年、351ページ
- ② 橋爪大三郎、筑摩書房、『橋爪大三郎の政治経済学講義』、2008年、343ページ
- ③ 橋爪大三郎、講談社、『はじめての言語ゲーム』、2009年、269ページ
- ④ 橋爪大三郎、大澤真幸、講談社、『ふしぎなキリスト教』、2011年、346ページ

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋爪大三郎 (Hashizume Daisaburo)

東京工業大学・大学院社会理工学研究科・教授

研究者番号：20530435

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし